岐阜市立女子短期大学研究紀要第 56 輯（平成 19 年 3 月）

杭州の洞窟聖地とその信仰について Ⅲ

Holy Caves and these Beliefs in Hangzhou Ⅲ

須 永 敬
Takashi SUNAGA

Abstract

In This paper, I intend to study three problems about holy caves of Hangzhou and beliefs in them. First, it should be confirmed that this research becomes a basic research of religious exchange between Japan and China after the South-Son period. Secondly, the outline of the transition of the beliefs for about 750 years from South-Son period to the present age is to be identified. Thirdly, the religious culture of holy caves in Hangzhou(Quiyun-dong, Jinxing-dong, Tongming-dong, Zilai-dong, and Laohu-dong) is to be reported and analyzed.

Keywords : 聖地・洞窟・泉・龍・仏教と道教

はじめに

本稿では、先ず杭州の代表的な地誌・随筆類に記された洞窟聖地の記載を表に整理し、南宋期から現代に至る洞窟聖地の変遷の概要を捉えたい。また、前稿〔須永 2006〕において論じた、鳳凰山西麓の洞窟についての追補報告を行うとともに、新たに玉皇山周辺における洞窟の報告を行いたい。

さて、上記の分析に先立って、これまでの研究の進展に伴って現れてきた新たな課題と展望について、ここに若干の考察を述べておきたい。

本誌に掲載してきた一連の考察〔須永 2005・2006〕においても述べてきたように、杭州地域における洞窟聖地の研究は、ひいては日本列島・朝鮮半島・琉球列島との比較研究という課題につながるものと筆者は考えている。これまでの中国洞窟聖地の研究は、主として内陸部の著名な洞窟の研究に偏っており、洞窟数の多い杭州を始めとする浙江省地域に関するものは極めて少なかったと言わざるを得ない。東アジアの洞窟聖地の研究は、このような局地的かつ限定的な研究成果を受けて形成されてきたのであり、今後再検討を行っていく必要があるといえる。

たとえば、中野幡能は、日本における石窟祭祀 (1) の起源について、「石窟寺院は遠くインドに起こり、西域に伝わり、敦煌、雲崗、龍門などを経て朝鮮半島、日本へと伝わった」〔中野 1981 491〕とし、伝来後に密教文化や日本固有の山岳信仰、すなわち修験道などと融合して独自の発展を遂げたのだという見解を述べている。しかし、このような理解は果たして正しいのであろうか。

中野の推論によれば、日本に伝わった石窟祭祀の文化は、日本国内で独自に成長したものとしているが、その推測の前提として、石窟祭祀の伝来が一回性のものであったという理解が存在しており、その見解には疑問が残る。

たとえば、英彦山北岳から発掘された平安末期の経筒は、宋人王七房の奉納品であった (2)。また、大南窟前の斜面から、修行に用いられ投棄されたと見られる土師器のなかには、12〜13世紀の中国陶磁器がかなりの比率で含まれている (3)〔山本 2002 6〕。このような遺物の存在から見えてくるのは、英彦山の石窟祭祀が中世に至っても大陸文化の影響を受けていたという事実である。

またさらに時代を下った鎌倉から室町時代にかけてはどうだろうか。たとえば、能登半島における石窟造営の歴史的要因を論じた間宮正光は、「各石窟の周辺には海あるいは交通路が展開し、密教寺院及び禅宗系（臨済禅）の勢力地に位置する傾向」〔間宮 2004 144〕を指摘するとともに、「この地域における石窟が主として鎌倉幕府崩壊後にみられることから、真言宗勢力が弱まり、禅宗（曹洞宗）、更には浄土真宗の影響が浸透していく状況で、律宗や臨済禅などの南宋文化を引き継いだ人びとの教線の強化、あるいは新たな展開を模索した結果」であるとしている〔間宮 2004 145〕。鎌倉後期以降、南宋文化を引き継いだ律宗や臨済禅の宗教者が、日本の石窟信仰に関与していたことを伺わせる指摘である (4)。

上記のことを考え合わせれば、日本列島における石窟祭祀は、一回的かつ単線的な伝来として理解するべきものではなく、数度にわたる多面的な影響を受け、その都度変容を遂げていったと見るべきであろう。このような分析を進める上で必要なのは、比較史、東アジア史的観点からの石窟祭祀の考察であるが、そ

の数は極めて少なく、山本義孝の論考〔山本　2001〕などを挙げるに止まるのが現状である。

上記のような視点を推し進めるためには、日本列島内のみならず、東アジア的な視野から石窟／洞窟祭祀の調査・研究が進展することが必要である。杭州の洞窟聖地を扱う本稿を含む一連の論文は、このような比較研究の礎になるものであることを、ここに再度位置づけておきたい。

１．主要文献に見る洞窟聖地の変遷

中国大陸の洞窟研究において、杭州の洞窟は研究のメインストリームから外れたものとなっており、学術的な検討がほとんどなされていないことは、前稿において既に示したとおりである〔須永　2005　82〕。

たとえば、中国全土における石窟寺院を紹介した長廣俊雄の「中国文化史蹟としての石窟寺院」においても、杭州の洞窟は、その末尾において「浙江省杭州の飛来峰、石屋洞、烟霞洞などがあるが、これは五代以降、宋・元のもので、しかも摩崖か自然洞を利用したものである。」〔長廣　1969　14〕と付けたり程度に触れられているのみである。

また、同書に収録される「中国石窟寺院年表」には、４世紀半ばから始まる中国石窟の歴史が記されており、その最盛期が唐代にあったことが明瞭に示されている。しかしながら、唐代以後の石窟の歴史は、いわばその栄光の残滓といった扱いとなっており、南宋の滅亡をもって石窟の歴史があたかも終焉を迎えたかのように記されている〔長廣（編）　1969　210-211〕。

しかし、間宮の前掲著でも示されている通り、日本列島に目を転じた場合、南宋滅亡前後の時期に禅僧などの宗教者によって仏教とともに洞窟祭祀の文化が伝えられた可能性は強いのである。筆者が一連の報告で論じている杭州の洞窟聖地は、中国大陸の石窟研究においては周辺的な課題でしかないかもしれない。しかし、これを日本列島との宗教文化交流という視点から見た場合には、この時代における当該地域の洞窟聖地こそが、日本列島の洞窟祭祀に強い影響を与えていた可能性が指摘できるのである。

上記の点を考慮すれば、本稿で扱っている洞窟聖地がいかなる時代の記録に登場しているのか、そしてどのくらいの期間信仰の命脈を保っていたのかを、一旦検討しておく必要があると考える。そこで、次に杭州の地誌等の主要文献から、洞窟聖地記載の変遷を一覧の形で確認してみたい。しかし、現在までの約 750 年間におよぶ洞窟聖地の変遷を追うことは容易ではない。書籍の性格や（地誌か随筆かなど）、記述範囲の違い（郊外を含むかどうか）、さらには洞窟名称の混乱による重複記載の可能性など、厳密にみれば問題を含むものと考えるが、洞窟聖地の変化をうかがい知る上では有効な手段であろう。代表的な文献中、管見の限りで確認できた洞窟名を表にしてみると、表１の通りとなる。

表のように、文献からは 60 以上の洞窟の名を確認することができる。ここから、南宋、明、清、そして近現代と、それぞれの時代における洞窟聖地の変遷をうかがい知ることが出来る。一般にいわれるような南宋以後の洞窟聖地の終焉といった説明とは反対に、後代に至ってもなお盛んに記録に登場していることには注目する必要があろう。

ところで、13 世紀の記録にある洞窟が、16 世紀の記録からは姿を消していたり、逆に後代になって新たな洞窟が加わっていたりと、洞窟聖地の信仰は極めて流動的な性格を持つものであったことが確認できる。このことを一体どのように理解すれば良いのであろうか。

洞窟聖地を考える上で前提となるのは、その洞窟を誰かが何らかの理由・目的によって聖性のあるものと判断しない限りは聖地とはなり得ないということである〔須永　2006　48〕。とするのであれば、宗教者なり民間の人びとなりの信仰が薄れてしまった洞窟聖地は、必然的に放棄され、単なる自然もしくは人工の洞窟となるのである。逆に、これまで単なる洞窟や岩陰とされてきた場所であっても、そこに霊験などの信仰が付与されることによって〔須永　2006　52　など〕、新たに洞窟聖地と認識され、名が与えられ、他の空間と区別されるようになることもあるのである。このような「放棄」と「発見」の繰り返しこそが、洞窟をめぐる民俗宗教の特徴といえるであろう。さらに言えば、その信仰の移り変わりは現在もなお進行中なのである。

２．鳳凰山西麓の洞窟聖地

C-c.　帰雲洞(Quiyun-dong)

『西湖志』によれば、杭州には帰雲洞の名を持つ洞窟が３箇所あるという。仮に（ア）・（イ）・（ウ）の帰雲洞と名づけておこう。一箇所（ア）は棲霞嶺にあり（『西湖新志補遺』）、もう一箇所（イ）は瑞石山に（『湖山便覧』）、そしてもう一箇所（ウ）がここで紹介する鳳凰山の帰雲洞である。前記の２洞（ア・イ）については、当該地区を踏査してみたが、それらしき洞窟は見あたらなかった。あるいは名称が混乱し、他の洞窟を帰雲洞の名で記したのかもしれない。

先ず（ア）の帰雲洞については、次のような記述がある。

> 帰雲洞　金鼓洞志、在道院鶴林道院在栖霞峰后山之左百余武山坳、洞不甚寛深、而洞外石骨嶙峋、文多皺叠、若朶雲之駐山、因以帰雲名之。諸志乗皆未載。〔『西湖新志補遺』巻１〕

表１　杭州主要洞窟名一覧

書名	淳祐臨安志	咸淳臨安志	西湖遊覧志	四時幽賞録	靈隠寺志	春在堂随笔	湖山便覧	西湖新志	西湖志	杭州市志	杭州的山	（須永踏査）	地区名	論文
年代	(1241-52)	(1265-74)	1547	明代（～1615）	1663	1899	1765	1921	1995	1997	2003	2003～		
1	青衣洞	青衣洞	青衣洞						青衣洞				（呉山）	
2	羅漢洞	羅漢洞					羅漢洞						（鳳凰・浄寺）	
3	金星洞	金星洞	金星洞				金星洞	金星洞	金星洞				（鳳凰山）	Ⅲ
4	水楽洞	水楽洞	水楽洞	水楽洞		水楽洞	水楽洞	水楽洞	水楽洞	水楽洞	水楽洞		銭江	
5	風水洞	風水洞					風水洞				風水洞		靈山	
6	靈化洞	靈化洞						靈化洞	靈化洞				（郊外天真院）	
7	登雲洞	登雲洞							登雲洞				（郊外天真院）	
8	鉄窗櫺洞	鉄窗櫺洞							鉄窗櫺洞				（赤山殿司）	
9	呼猿洞	呼猿洞	呼猿洞		呼猿洞		呼猿洞	呼猿洞	呼猿洞	呼猿洞	呼猿洞		靈隠	
10	巌石室龍泓洞	龍泓洞	龍泓洞		龍泓洞		龍泓洞（通天洞）	龍泓洞	龍泓洞	龍泓洞	龍泓洞		靈隠	
11	石屋洞	石屋洞	石屋洞			石屋洞	石屋洞	石屋洞	石屋洞	石屋洞	石屋洞		銭江	
12	煙霞洞	煙霞洞	煙霞洞	煙霞石屋・煙霞春洞		煙霞洞	煙霞洞	煙霞洞	烟霞洞	煙霞洞	煙霞洞		銭江	
13	蝙蝠洞	蝙蝠洞	蝙蝠洞				蝙蝠洞	蝙蝠洞	蝙蝠洞	蝙蝠洞	蝙蝠洞		岳廟	Ⅰ
14	龍洞	龍洞									龍洞		（臨平山）	
15	細礪洞	細礪洞											（臨平山）	
16	香林洞	香林洞	香林洞		香林洞		香林洞						（下天竺）	
17	大雄山白龍洞	大雄山白龍洞											（銭江県崇化郷）	
18	護国仁王院洞	護国仁王院洞	黄龍洞				黄龍洞	黄龍洞	黄龍洞	黄龍洞	黄龍洞		岳廟	Ⅰ
19	海雲洞	海雲洞											（仁和県永和郷）	
20	雲洞	雲洞												
21		棲霞洞	栖霞洞				栖霞洞	栖霞洞	棲霞洞	栖霞洞	栖霞洞		岳廟	Ⅰ
22			紫雲洞	紫雲洞		紫雲洞	紫雲洞	紫雲洞	紫雲洞	紫雲洞	紫雲洞		岳廟	Ⅰ
23			金鼓洞			金鼓洞	金鼓洞	金鼓洞	金鼓洞	金鼓洞	金鼓洞		岳廟	Ⅱ
24			玉乳洞		玉乳洞				玉乳洞	玉乳洞	玉乳洞		靈隠	
25			青林洞				青林洞		青林洞	青林洞	青林洞		靈隠	
26			蓮花洞	蓮花洞			蓮花洞	蓮花洞	蓮花洞		蓮花洞		鳳凰	
27			射旭洞		射旭洞		射旭洞	射旭洞	射旭洞	射旭洞	射旭洞		靈隠	
28			華津洞				華津洞	華津洞	華津洞				方家峪	
29			通明洞				通明洞		通明洞		通明洞		鳳凰山	Ⅲ
30			仙姑洞				帰雲洞（ウ）	帰雲洞（ウ）	帰雲洞（ウ）		帰雲洞（ウ）		鳳凰山	Ⅲ
31					金仏洞				金仏洞				下天竺寺	
32					円公洞				円公洞				三生石側（靈隠寺）	
33						香山洞	香山洞	香山洞			香山洞		岳廟	Ⅰ
34							无龍洞	天龍洞（无門洞）			无門洞		銭江	
35							石仏洞		石仏洞		石仏洞		（鳳凰・浄寺）	
36							紫陽洞	紫陽洞	紫陽洞				（南高峰）	
37							天池洞	天池洞	天池洞				（銭江・南高峰南）	
38							幽居洞	幽居洞	幽居洞		幽居洞		鳳凰	
39							観音洞	観音洞	観音洞				方家峪	
40							蝙蝠洞	蝙蝠洞					（銭江）	
41							涼雲洞							
42							帰雲洞（ア）	帰雲洞（ア）	帰雲洞（ア）		帰雲洞（ア）		瑞山	
43								千人洞	千人洞	千人洞	千人洞		銭江	
44								白龍洞					（銭江）	
45								門虎洞						
46								青霞洞	青霞洞				呉山宝山	
47								无門洞（千人洞近く）					（銭江）	
48								金星洞（イ）					（宝蓮山）	
49								帰雲洞（イ）	帰雲洞（イ）				北山	
50									臥雲洞		臥雲洞		岳廟	Ⅱ
51									紫来洞		紫来洞		鳳凰	Ⅲ
52									無門洞				黄龍洞西	
53									陽明洞				玉皇山南	
54									接引洞				方家峪口蓮花峰北	
55											川正洞		岳廟	Ⅱ
56											北観音洞		鳳凰	Ⅱ
57											南観音洞		鳳凰	Ⅱ
58											老虎洞		鳳凰	Ⅲ
59											石龍洞		鳳凰	
60											潜雲洞		鳳凰	
61												銀鼓洞	岳廟	Ⅱ

※1　この表は、洞窟聖地変遷の概要を知るため、比較的入手が容易な地誌等の資料から、現時点（2006年11月）までに確認できた主要な洞窟を一覧にまとめたものである。
※2　異なる名称であっても同じ洞窟を指す場合には、同じ欄に記載する。また、同名でも異なる洞窟の場合には、洞名のあとに（ア）（イ）などのカタカナを付した。
※3　地区名で、未踏査等の理由により場所が未だ明らかでないものについては括弧内に示した。また、場所が不明なものについては空欄とした。
※4　すでに本誌において発表した洞窟については「論文」の項に、Ⅰ〔須永　2005〕、Ⅱ〔須永　2006〕、Ⅲ〔本稿〕をそれぞれ示した。

図１　鳳凰山・玉皇山地区と洞窟の分布（原図は〔馬　2003　58〕）

また、（イ）の帰雲洞については、次のような記述がある。

> 帰雲洞　又名石屋、頂穹旁削、中可列数十人。天将雨、則雲気自出、将晴、気収、因名。洞口有寿星石、北向独立、如朝斗然。〔『湖山便覧』巻 12〕（資料中の傍線は筆者による。以下同じ。）

ここには、別名を石屋といい、洞口には寿星石があると記されている。洞口に寿星石のある点では、前稿で論じた川正洞〔須永　2005　51〕と共通しており、同洞異名かと考えたが、規模の記述からすると川正洞とするには大きすぎるようである。ただ、帰雲という名称を述べる「天将雨則雲気自出将晴気収因名」の部分は、雨を降らせる雲が出入りすると考えられたために帰雲洞という名が付けられた旨の伝承であり、参考になる。

さて、ここで紹介する帰雲洞（ウ）［写真１］は、鳳凰山（174m）の東南に今も確認することができる。鳳凰山は南宋代の京城背後（西側）の山で、山容が翼を広げた鳳凰のようであることからその名がある。

帰雲洞（ウ）に関する文献は少ない。『湖山便覧』巻 10 の記述には「旧称仙姑洞、明令樊良枢、易名帰雲」とある。もしも古名が仙姑洞であれば、『西湖遊覧志』巻７、勝果寺（後述）の項に見られる「峰之后、為三仏石、仙姑洞、郭公泉、臥醉石、放光石」の「仙姑洞」の記述は即ち帰雲洞のこととなる。

洞窟入口向かって右には「帰雲」二字の題刻がある。開口部の高さは２mほどである。中に入ると若干低くなるが大人が通れるほどの高さはある。長さは 12m ほどあり、最奥部には土砂が堆積しているものの、通り抜けができる。堆積した土砂を少し登り進むと山の西側の眺望が開ける場所に出る。先述の帰雲洞（イ）の由来に従えば、杭州の人びとはこの洞窟を雲気が出入りする場と考えていた可能性もある。また、洞窟入口の南側岩陰には、「己丑春」の紀年銘がある「白玉宮墻」の題刻があり、その岩陰にかつて何かが祀られていたとも考えられる。

さて、この帰雲洞で興味深いのは、周辺にいくつかの小さな洞穴や岩陰が存在しており、その周囲には多くの題刻が認められるとともに、現在も信仰の対象となっているものが含まれている点である。その例を次に示したい。

写真１　帰雲洞

写真２　通明洞

C-d.　通明洞（Tongming-dong）

C-e.　金星洞（Jinxing-dong）

両洞窟の名は、『西湖遊覧志』に「山下有金星洞、通明洞」〔巻７〕と現れるのだが、資料は極めて限られたものである。

通明洞［写真２］は、帰雲洞と後述の三尊石仏のほぼ中間地点に位置する洞窟であり、入口右側の題刻にその洞名が刻まれている。洞窟には２箇所の入口があり、通り抜けることが可能である。「石門」の題刻が刻まれているのもそのためであろうか。狭い洞内の奥には大小の２室がこぶ状に付随している。大きい方でも奥行きが２m ほどしかない小さな室であり、最奥部には土砂の崩落を防ぐためと思われる煉瓦で壁が設けられている。現状は信仰の対象となっている痕跡を認めることはできない。

馬によれば、通明洞の傍らにある「上天梯」という石段を登ると、「飛龍仙窩」（龍の住処の意）という場所に出ることができ、またさらに行くと「放光石」という巨石が立っているというが〔馬　2003　69〕、筆者は確認することができなかった。

一方、金星洞については、既に 13 世紀の地誌である『咸淳臨安志』に「金星洞　在鳳凰山介亭下（中略）洞中生金星草因此得名」〔巻 29〕として登場している。金星草とは、薬草とし

ても用いられるウラボシ科のシダ「ノキシノブ（軒忍）」の別名であり、洞名の由来として記されている。しかし、その後の『湖山便覧』巻10には「按此洞今无知人」、『西湖新志』巻２にも「此洞今无知人」とあるように、既に18世紀にはその存在が不明となっていたようである。ただ、この周辺には特に名を持たない数カ所の洞窟が認められ、そのいずれかが金星洞であった可能性もある。

鳳凰山には岩場が露出した箇所がいくつもあり、題刻が刻まれている岩も多い。最も大きな題刻の一つは、1.2mの字で「鳳山」と刻まれた南宋の王大通の題刻であるが〔馬　2003　69〕、その南側の岩陰にも小さな洞窟があり、壁面を利用した祭壇が設けられている。またその傍らの岩の窪みには小さな観音像が祀られている［写真３］。また、その洞窟の南側には、岩を刳り抜いて観音像を安置した人工のものと思われる岩陰が作られており、その前面に亭が設けられている。また、付近には小さな池があり、「鳳凰池」の題刻が壁に付されている。

写真３　観音を祀る洞窟（中央奥）と亭（左）

写真４　上部に池を持つ岩陰

そこを南に進み、二叉の道を西側にすすむと、再び道が分かれているが、そこを西北に歩むと「観微」「聴講」と左右に刻まれた岩に挟まれた岩陰がある［写真４］。その左にはつま先がようやく引っかかる程の小さな石段が刻まれており、横には「后僊窩」という題刻がある。この石段を２m半ほど登り上の岩に取り付くとそこにも小さな池が設けられている。

上記に述べた岩陰や洞窟は、特別な名は付けられていないようであるし、記録もない。また、観音が据えられた岩陰と亭以外の箇所は、現在信仰の対象とはなっていないようである。ただ、ここに挙げたもののなかに、古記録に登場する金星洞が含まれている可能性もあるだろう。

また、これだけの岩陰や洞窟が集中的に存在していることは、帰雲洞や金星洞の宗教的性格を明らかにするうえでも重要な点である。当地を考える上で注目したいのは、聖果寺跡の存在である。『西湖遊覧志』第７巻には次のような記載がある。

> 勝果寺　唐乾寧間（894－897）、无著喜禅師建。呉越王鐫、弥陀、観音、勢至三仏、及十八羅漢像于石壁。宋慶暦初、賜額崇聖寺、元至正間（1341-1368）毀。皇明洪武（1368－1398）初、興初禅師建、又毀。永楽十五年（1417）重建。（資料中の西暦は筆者による。以下同じ。）

『湖山便覧』巻10に「勝果寺　一作聖果」とあるように、この勝果寺とは聖果寺を記したものである。今日はその跡しか残されていないが、寺跡周辺の岩に刻まれた摩崖石像や題刻の多さが往事の繁栄を物語っている。特に著名なのは、聖果寺「西方三聖」残迹（五代呉越　907-978）である［写真５］。王の調査によれば、本尊阿弥陀仏：高さ6.2m、左脇侍：観世音菩薩、右脇侍：大勢至菩薩：5.1mという大きな摩崖仏であり、これらの像の下に刻まれた須弥座だけでも 2.5m の大きさがある〔王 1986　図版説明〕。ただし、現在はその崩れ落ちた残滓を見ることができるのみである。年代が経た結果として崩落した可能性もあるが、頭部を中心に損傷が激しいことから、後代に意図的な破壊を受けたのかもしれない。

聖果寺に関する資料が少ない段階ではあるが、これまで見てきた杭州の洞窟聖地のなかには寺や廟を伴う、もしくはかつて伴っていたものが散見される（黄龍洞、栖霞洞、香山洞、川正洞、北観音洞、南観音洞など）〔須永　2006　53〕。本節で取り上げた帰雲洞、通明洞、金星洞はいずれも聖果寺跡後方の山中に位置しており、聖果寺の信仰との関係が予想される。仏教思想に基づいたと思われるその信仰がいかなるものであったのか、また各洞窟がその信仰のなかでいかなる位置づけをされていたのかについては不明であるが、これらの洞窟聖地の存在は、聖果寺の信仰や杭州の仏教の特質を捉える上で重要な手がかりになるものではないかと考える。

写真５　聖果寺「西方三聖」残迹

写真５　紫来洞入口

写真６　紫来洞内部

写真７　紫来洞内部の池

３．玉皇山周辺の洞窟聖地

D-a. 紫来洞（Zilai-dong）

杭州の洞窟のうちで、最も規模が大きいのが玉皇山（240m）の山腹にある紫来洞であり、観光地としても著名な洞窟の一つとなっている。入口のゲート［写真５］を通って洞窟を下りてゆくと、色とりどりにライトアップされた広い空間［写真６］に出る。「広可容千人」、つまり千人の人が入れる洞窟というのも強ち誇大な表現とは言えないほどの広さと奥行きを備えている。洞内の所々には様々な神像が飾り付けられているが、これらは無論近年の作である。洞内右手には池がある［写真７］。池も当然のごとくライトアップされているが、池の天井部分には大きな穴が空いており、そこから外の光が池に差し込んでくる。元の広い空間に戻り、洞窟の奥に向かって、滑りやすい急な斜面を進んでいくと、やがて進入禁止の看板が現れ、それ以上入ることはできない。危険防止のためと思われるが、その場所から見ても洞内の道は相当奥まで続いており、かなりの規模を持つ洞窟であることが見て取れる。

ただし、規模は大きいものの、杭州の古記録にはほとんど記載がない。『西湖志』によれば、洞名の初見は光緒７年刊（1881）の『玉皇山廟志』であるという。1765 年刊の『湖山便覧』にもその名が見られないことから、恐らく 18 世紀末から 19 世紀にかけて登場した、比較的新しい洞窟であることが分かる。なお、『西湖志』には、「民国十九年（一九三〇）経道士開掘拡拓、始成大洞、可供游覧」とあり、現在のように大規模になったのは 20 世紀初頭であるとも考えられる。

『西湖志』の引く『杭州玉皇山志』巻２（民国時代）には、

> 紫来洞旧名飛龍洞、狭甚隘甚、経紫東道人開鑿、拓而広之、勝昔倍蓰矣。洞口石壁上有名人題跋、旁横石牀、顔曰紫東臥游処。循級而下、広可容千人。右有龍池、終年水不涸、漲亦不泛、以鉄杆欄之、坎不勝険。左有幽邃、俟石工告成、更当増勝。且洞中石龕上又有飛潜動植鱗甲森巖枝葉扶疏之状、此真天然勝境也。

とある。

管見の限りでは、旧名とされる「飛龍洞」の名を主要な地誌類に確認することはできなかった。杭州の洞窟聖地中で最大の規模をもつ紫来洞が古記録に登場しないことには疑問が残るが、

ここに示されているように、紫東道人という人物が、狭かった洞窟を開鑿したという伝承があることを考えれば、石材調達のために開鑿され、大規模な洞窟となったとも推測される。また、この伝承は同時に、紫来洞の開発に道教的な宗教者の関与があったことを暗に示しているとも取れる。

ところで、この紫来洞の位置する玉皇山の特徴として、道教との関係を伝える記録や伝承が多い点が挙げられる。現在山頂にある福星観の案内板には、唐代まで仏教寺院であったものを、後代道教寺院に改めたと記してある。

また、馬によれば、元代の玉皇山には、全真教七真人のひとり長春真人丘処機（1148-1227）が棲んでいて、白華丹井を造ったとされる。なお、山の名は明代に玉皇山と定められたもので、正徳10年（1515）に福星道院と大羅宝殿が造られたという〔馬 2003 84〕。

福星観は今もあるが、レストランや展望台などが境内にあり、観光地の色合いが強い。古くは玉皇宮とも称されていたようであり、『西湖新志』巻６には、次のように紹介されている。

> 玉皇宮　在育王山巓。故育王山亦称玉皇山。清雍正間（1723-1735）、浙督李衛、以杭多火患、形家謂、此山為離龍之祖。乃于山腰置鉄缸七、倣北斗星象、以此排列。缸之外、鋳有符籙祝詞。又于巓鑿日月池、立廟以祀北斗暨玉皇上帝。朔望、有司上山拈香、省視缸水盈縮、則務令注満、蓋取用坎制離之義。其後、年久漸廃。嘉慶己卯（1819）、陳望坡侍郎撫浙、復挙而新之。咸豊辛酉（1861）、杭垣再陥、廟既被毀、缸又無存。同治庚午（1870）、楊昌濬撫浙、次第建復、悉如旧観。〔『西湖新志』巻６〕

道観の盛衰の激しさを伺うことが出来る資料であるが、特に創建に関する由来が興味深い。杭州に火難が多いのはこの山が離龍（「離」は八卦の一つで火を象徴するので火龍といった意か）の祖となっているからであるとし、道教の符籙を表面に鋳た鉄瓶を、北斗星を倣って７つ山腹に置き、瓶には水を常に満たしておいたという。「坎」は水を象徴するので、資料中の「坎制離」はさしずめ水を以て火を制すという意味であろう。さらに山頂に日月の池（天一池が現在もある）を掘るとともに、北斗と玉皇上帝を祀った廟を建てたという由来である。

ここに登場する北斗七星を象徴した鉄の水瓶七星缸は現在も紫来洞を少し登った場所に現在も置かれ、中には清水が湛えられている。馬によれば、七星缸は文化大革命の際に壊されてしまい、現在のものは1997年秋に復元したものであるという。また、同書には杭州が日本軍によって陥落した際、軍火を熾すため七星缸を山から降ろそうとしたが、重すぎてはこぶことが出来なかったという話が載せられている〔馬 2003 93〕。

また、杭州の道教的景観として著名な八卦田［写真９］も、玉皇山から八角形の形が望める場所に位置している。これも資料は少ないが、馬によれば、南宋の頃、勤農を勧めるため皇帝自らが耕す田として造られたものであり、毎年春には文武百官を引き連れて自ら農事を行い、農事の尊重を示し、五穀豊穣を祈ったとする。また、これが昔の天地祭祀の郊壇であり、明代には八卦田の形が定まったとする説を紹介している〔馬 2003 94〕。

このような福星観や七星缸、八卦田という道教的な宗教との関わりを持ちつつ伝承されてきた点は、紫来洞の大きな特徴の一つとして指摘することができるであろう。しかし、記録に現れる限りでは、その歴史はそれほど古いことではないようである。

写真８　七星缸

写真９　八卦田

このような洞窟聖地の道教的性格を物語る記録の一方、杭州の伝説のなかにも紫来洞が登場しており、そこでは龍の伝承と結びつけられ語られていることが注目される。そこで、陳瑋君の採集整理した話〔杭州市文化局（編） 2000 64-67〕を、北沢の訳文〔杭州市文化局（編）、北沢（訳） 1992 104-108〕を参考にしながら要約して記したい。

玉皇山の紫来洞は、飛龍洞ともいわれ、昔は龍が住んでいた。龍は十日ごとに洞を出て杭州上空を飛び、火の玉を吐いたり吸ったりして遊び回った。そのこぼれ落ちる火の粉で、杭州はあちこち火事となった。ある日、鉄の槌を持ち、髪も髭も真っ白な鍛冶屋の老人が杭州にやってきた。ちょうどその夜は飛龍がやってくる夜であった。いつものように杭州城内は焼けてしまったが、老鍛冶はその間龍を観察し、退治の方法を見つけた。それは、各戸から包丁を一丁ずつ寄付してもらい、その鉄を溶かして七つの大鉄瓶を造るというものであり、人びとは力を合わせてそれを造り上げた。老鍛冶は、七つの鉄瓶を玉皇山の飛龍洞まで運ばせた。洞窟の中では龍がぐっすりと寝ていた。老鍛冶の指示で、龍の両髭、両手、両足にそれぞれ鉄瓶を乗せ、最後の一つを尻尾に乗せた。老鍛冶は鉄の槌で龍の頭を狙いながら、七つの鉄瓶に水を注ぐよう指示した。その時、１人が誤って水桶を取り落としてしまい、その水が龍の鼻の穴へ流れ込んでしまった。驚いた龍はものすごく大きなクシャミをしたので、あっという間に老鍛冶は吹き飛ばされてしまい、行方知れずとなってしまった。目を覚ました龍は怒り暴れて鉄瓶を振り解き、地底を潜って安徽省の山へ抜け出し、そのまま天に昇り、以来二度と龍の害は無くなった。紫来洞が安徽省へと通じるのは、この時にできたものである。

このように、七星缸が杭州の火難を防ぐためのものとして登場している点では地誌とも共通しているが、旅の老鍛冶が紫来洞に棲む龍を退治するというモチーフのなかで語られている点がこの伝説のユニークな点である。前掲の『杭州玉皇山志』に、紫来洞の旧名として「飛龍洞」の名が記されるとともに、洞内の池に「龍池」という名が付されていることを考えれば、この洞窟の信仰に民間の龍の伝説が伴っていたことは明らかである。また、この洞窟が地中を通じて遠く安徽省につながっているという話にも、洞窟を介してつながる地下世界という民俗的な観念を見ることが出来よう。

このように、紫来洞の信仰は大きく分けて道教的信仰と民俗的信仰の二つの流れがあったことを理解することが出来る。しかし、この両者は対立の図式にあるのではなく、両者が互いに補い合いながら伝えられていることは、火と龍のモチーフ一つをとってもうかがい知ることができる。玉皇山という地理的・宗教的な条件が、道教と民間信仰とを包含した紫来洞の特徴的な信仰を創り出したのである。

D-b. 老虎洞（Laohu-dong）

玉皇山西南西、月宝亭から下りる山道の脇に老虎洞がある。管見の限りでは、この老虎洞を記した文献は、近年発行された『杭州的山』掲載の地図のみであり、その歴史の詳細を知ることはできない。

洞窟入り口付近は、岩が崩落したような形となっており、洞口にも土砂が堆積している。洞内はＵ字型で３ｍ四方ほどの広さがある。天井部は入り口こそ人の頭が通れる高さがあるが、奥へ行くにしたがって狭く低くなっている。洞内には、山を散策した人たちが残したと思われるゴミが散乱しており、仏像や祭壇などといったものもないのだが、洞内の数カ所には線香が供えられた跡が確認でき、この洞窟が信仰の対象になっていることをかろうじて窺い知ることができる。

また、洞窟周辺の山道の敷石には、「九曜護佳城相［　］霊境闢」や「三英承故地玉皇将隆貴人」などと刻まれた石が再利用されており、かつて破壊された寺廟の石が転用されたものと考えられる。ただし、これらが老虎洞の信仰と結びつくものであるかについては不明である。

写真 10　老虎洞入口

写真 11　老虎洞前にある山道の敷石

おわりに

以上のように、本稿では先ず、杭州洞窟聖地の研究が南宋以

降盛んとなる日中宗教交流の原点を解明する上での基礎的作業となることを再確認するとともに、南宋から現代に至るまでの約 750 年間に編まれた主要な地誌に登場する洞窟を一覧表としてまとめ、その変遷を明らかにした。また、鳳凰山地区、玉皇山地区における洞窟聖地の報告を行い、その歴史と民俗宗教についての概要を報告した。

具体的な洞窟聖地の継続的分析から明らかになったことは、前稿に引き続き本事例においても龍、泉、寺廟、観音といった洞窟信仰の構成要素が確認された点である。現在は悉皆調査的な報告をしつつ、具体的事例の蓄積を行っている段階であるが、ある程度の資料が出揃った段階で、これらの諸要素をテーマとした分析を行い、さらに詳細な考察を進める展望が開けてきたと考える。

また、今回取り上げた鳳凰山と玉皇山という二つのフィールドは、隣り合わせに位置しているにも関わらず、それぞれ仏教・道教の色合いが強く、鳳凰・龍という動物にシンボライズされるような特徴的な宗教世界を持っている。その両者を同時に取り上げることが出来たことによって、仏教・道教と洞窟聖地という新たな課題が見えてきた。それぞれの洞窟聖地は、形態や規模、そして信仰の隆盛を迎えた時代が異なっており、極めて対照的な事例であったといえるが、逆にそのことによって、杭州における洞窟聖地信仰の多様性とその変遷を知ることが出来たと考える。

このことは、表としてまとめた「杭州主要洞窟名一覧」からも確認したように、洞窟聖地への信仰が「放棄」と「発見」を繰り返す、流動的な特徴を持つものであることを裏付けることともなった。それは同時に、洞窟聖地信仰の流動性が、中国大陸の政治史や宗教史とどのような関係性を持つのか、あるいは持たないのかという今後の課題へとつながる問題であるといえよう。

また、上記のような中国大陸における洞窟聖地信仰の変遷が明らかになることは、日本列島における洞窟聖地を考える上でも有益であると考える。たとえば日本における中世洞窟聖地の展開を考える際には、その当時の中国、特に杭州周辺における洞窟聖地への信仰がどのようなものであったのかという点にも目を向ける必要があるであろう。安易な比較は避けなければいけないとはいえ、当時の大陸と列島双方の洞窟信仰の展開に視野を広げることは、東アジア地域の宗教交流研究に新たな研究視角をもたらす可能性があると考える。

註

（1）聖なるものとみなされた自然の洞穴や鍾乳洞、岩陰についての学問的な統一的な名称はなく、「洞窟」、「窟」、「石窟」、「岩陰」といった語、もしくはその機能に注目した「修行窟」といった語が研究者それぞれの定義によって用いられているのが実態といえる。本稿では便宜上、中国大陸の事例については「洞窟」を主として用い、日本列島の事例についてはそれぞれの論考に従うか、あるいは最も一般的な「石窟」を主として用いているが、用語上の区別以上の意味を持つものではない。

なお、窟の分類については、形態と機能に着目した重松敏美の先駆的研究〔重松　1969　94〕のほか、窟の平面形状から分類した花村利彦の研究〔花村　1981　421〕などがある。また近年になり、時枝務が修行窟の分類案〔時枝 2005　135-136〕を提示するとともに、窟修行の歴史を修行窟の形式から復原しようとしている。

（2）山本義孝氏のご教示による。また、『英彦山修験道館展示資料』〔1987　英彦山修験道館〕に当該の記載がある旨を教えていただいた。

（3）なお、山本義孝はこのような中国陶磁器が発掘される窟とは別に、出土品に中国陶磁器を含まない窟（鷹栖窟など）が存在することを指摘したうえで、両者の違いが、一山の主要な修法が執り行われた窟（前者）、修行を目的とした修法が行われた窟（後者）という差にあるのではないかと指摘している、〔山本　2002　11〕。

（4）間宮論文にもあるように、中世石窟の一形態である「やぐら」は中世の特徴的な墓制として知られており、そこに南宋の石窟文化の影響をみる向きもある。しかし、管見の限りでは杭州の洞窟聖地と墓制との結びつきを示す資料はみあたらない。この点は今後発掘調査などが行われれば、明らかになる可能性もあるが、資料の少ない現時点での判断は留保しておきたい。

参考文献

王　士倫（編）　1986　『西湖石窟』　浙江人民出版社

杭州市園林文物管理局（編）　1995　『西湖志』　上海古籍出版社

杭州市文化局（編）　2000（新版）　『西湖民間故事』　浙江文芸出版社

杭州市文化局（編）北沢功（訳）　1992　『杭州の伝説』（原題『杭州的伝説』）　随風舎

馬　時雍（編）　2003　『杭州的山』　杭州出版社

重松　敏美　1969　『豊州求菩提山修験文化攷』　豊前市教育委員会

須永　　敬　2005　「杭州の洞窟聖地とその信仰について Ⅰ」〔『岐阜市立女子短期大学研究紀要』54〕

須永　　敬　2006　「杭州の洞窟聖地とその信仰について Ⅱ」〔『岐阜市立女子短期大学研究紀要』55〕

時枝　　務　2005　『修験道の考古学的研究』　雄山閣

中野　幡能　1981　「国東・臼杵の磨崖仏と修験道文化」〔五来

重（編）『修験道の美術・芸能・文学』Ⅱ　名著出版〕
長廣　俊雄　1969　「中国文化史蹟としての石窟寺院」〔長廣　俊雄（編）『中国の石窟寺』（世界の文化史蹟７）講談社〕
花村　利彦　1981　「英彦山の修験道遺跡と文化財」〔五来重（編）『修験道の美術・芸能・文学』Ⅱ　名著出版〕
針谷浩一・中川委紀子　1986　「修行窟」〔宮家準（編）『修験道辞典』　東京堂出版〕
間宮　正光　2004　「能登半島における中世石窟の様相」〔『日本考古学』18　日本考古学会〕
山本　義孝　2001　「北部九州における山岳修験研究の新たな方向性―韓国の山岳宗教遺跡との比較―」〔『山岳修験』27　日本山岳修験学会〕
山本　義孝　2002　「『彦山流記』に記された窟の世界」〔『山岳修験』29　日本山岳修験学会〕

資料

『淳祐臨安志』宋：施諤（撰）〔中国地誌研究会（編）『宋元地方志叢書』7　1978　中国地誌研究会〕
『咸淳臨安志』宋：潛説友（纂）1268（咸淳 4）〔中国地誌研究会（編）『宋元地方志叢書』7　1978　中国地誌研究会〕
『西湖游覧志』明：田汝成（撰）1547（嘉靖 26）第九巻〔(1983)『景印文淵閣四庫全集』571　台灣商務印書館〕
『湖山便覧』清：翟灝等（輯）　1765（乾隆 30）〔1983　『中国方志叢書』華中 483　成文出版社〕
『春在堂随笔』清：兪樾　1899（光緒 25）〔1999　『清波小志』上海古籍出版社〕
『西湖新志』民国：胡祥翰（輯）1921（民国 10）〔初版本〕
『西湖新志補遺』民国：胡祥翰（輯）1923（民国 12）〔1998　『湖山便覧』　上海古籍出版社〕

謝辞

本稿に関わる現地調査においては、浙江工業大学外国語学部学生の許倩、李蕾、呉恩斯の各氏に通訳の労を執っていただいた。ここに心から感謝申し上げる。

（提出期日　平成 18 年 11 月 27 日）